

# 特別展「哲学者〜井上円了の世界〜」開催報告

小林健一

*kobayashi kenichi*

はじめに

紋別市立博物館では、令和元年六月一日（土）〜六月三十日（日）を会期に、特別展「哲学者〜井上円了の世界〜」を開催した<sup>(1)</sup>。

明治を代表する哲学者であり、東洋大学の創立者である井上円了は、全国巡回講演の際には紋別にも滞在し、円満寺と紋別小学校で講演を行い、書を残し、人の縁を作った。円満寺の第二代住職橘薫一は、井上円了が紋別を訪れた当時八歳だったが、円了の紋別訪問が縁となって、後に東洋大学に入学した。東洋大学に入学した橘薫一は、そこで生涯の友となる勝承夫と出会った。詩人であり、東洋大学の理事長を二度務めた勝承夫は、文部省唱歌「こぎつね」や、有名な「歌の町」の作詞者としても知られている。紋別小学校創立六十周年の時には、橘薫一の依頼により勝承夫は校歌を作詞した。その後、勝承夫は渚滑中学校、潮見小学校、大谷幼稚園等の校歌、園歌についても作詞を行った。井上円了の作った縁は紋別市内の校歌、園歌に繋がり、それは今も歌い継がれている。しかし、校歌の由来を知る紋別市民は多くない。

井上円了没後百年を迎えた本年、円了の足跡を振り返り、円了と紋別との関わりや円了が生み出した人脈、校

歌の由来などを紹介し、地域の人々が井上円了について学び、人の縁について考える機会にしたいとの思いから本特別展を企画した。

特別展の主な内容については次のとおりである。



特別展「哲学者～井上円了の世界～」の会場風景

1 明治四十年九月、紋別を訪れた井上円了

井上 円了いのうえ えんりょう（安政五年二月四日―大正八年六月六日）

哲学者、教育者、東洋大学の前身となる哲学館の創立者。妖怪博士としても知られる。

越後国長岡藩西組浦村（現在の新潟県長岡市浦）にある真宗大谷派慈光寺の長男として生まれる。

明治十八年、東京大学文学部哲学科を首席で卒業。

明治二十年、二十九歳で私立学校・哲学館（後の東洋大学）を設立。「諸学の基礎は哲学にあり」という教育理念のもと、お金や時間に余裕のない人にも教育の機会を提供し、通学できない人のために通信教育も行なった。円了の支援者の中には勝海舟もいた。



明治 36～38 年、45～47 歳の時の井上円了(2)

明治三十六年に「教育的、倫理的、哲学的精神修養」の公園〈哲学堂〉の建設に着手。明治三十九年に学校を退隠した後は、道徳普及のための修身教育運動と、哲学堂の拡張と経営に専念した。

社会教育や生涯学習に注目したパイオニアであり、全国を巡回して講演を行い、哲学の伝道、日本人の精神・道徳向上を願い、民衆に教育の機会を開放した。世界視察旅行も三度行なっている。

紋別と井上円了との縁





大正末ころの哲学堂(3)

井上円了は全国巡回講演において明治四十年九月二十四日に紋別を訪れ、古屋憲英医師の経営する静春堂（医院）に宿泊し、円満寺（初代住職橘智照）と紋別小学校で講演を行い、同郷の高野庄六とも会っている。この時の様子は井上円了による『南船北馬集 第二編』に記録されている。

## 南船北馬集 第二編

### 明治四十年九月

二十一日。午前三時、釧路丸入港の報あり、夜陰を破りて乗船す。  
前田、宮崎、吉田等の諸氏、霜気をおかして送行せられたるは、大いにその厚意を謝せざるを得ず。十一時、枝幸郡枝幸村（現在北海道枝幸郡枝幸町）に着す。宿所は藤野旅館なり。稚内よりここに至るの間、沿岸三十余里、一帯の連山起伏せるも高からず、林野ありて耕地なし、満目蕭寥を極む。枝幸は近來砂金を発見せしも、年々その採量を減ずるに従い、衰退の風あり。当夕、また天空遠く晴れ、月色皎々たり。

### 〈中略〉

二十三日 晴れ。午前、小学校にて談話をなす。校内に米国天文博士の寄贈にかかる図書千巻を蔵す。更に竜寛寺に移りて講演をなす。各宗寺院の発起なり。午後一時、伊勢丸に投乗し紋別に向かう。この間、約三十里あり。雄武、興部に寄港して進む。陸上はただ山林の鬱



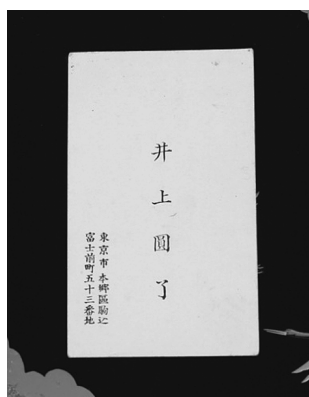
明治 35 年夏の紋別海岸、弁天町付近 左端が円満寺



明治 38 年ごろの紋別市街、中央やや左が静春堂医院、後方は 1〜3 丁目市街

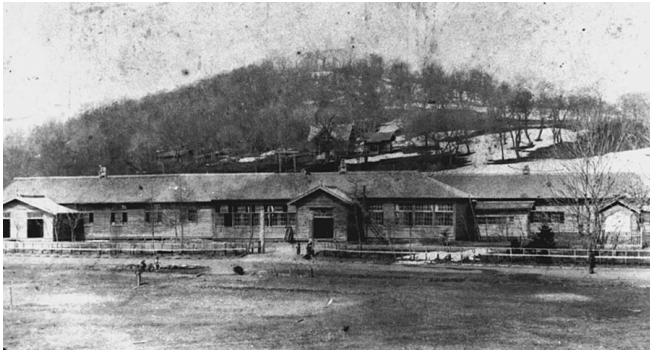


静春堂医院の外観 現在の消防署の場所にあった。



円了が明治 40 年 9 月に円満寺で講演を行った時の名刺(4)。

葱たるを臨むのみ。



幸町3丁目に移転（明治29年）した後の紋別小学校

二十四日（秋季皇霊祭）晴れ。午前九時、上陸。紋別郡紋別村（現在北海道紋別市）静春堂に入宿す。これ、医師名古屋憲英氏の宅なり。昼夜ともに円満寺にて開演す。住職は橘智照氏なり。静春堂上はるかに知床岬を望み、眺望すこぶる佳なり。

知床岬遠与雲斉、紋別湾頭望欲迷、風歇朝来秋水穩、静春堂上見漁  
鮭、

（知床の岬は遠く雲にも似て、紋別湾のほとりからはるかに見てみま  
ごうばかりである。風もやんで朝ともなれば秋の澄んだ水もおだや  
かに、静春堂の上からは鮭漁が見えるのであった。）

当時、まさしく鮭漁の時節なり。

二十五日 晴れ。午後、小学校にて開演す。同郷人高野庄六氏に邂逅す。  
当夜、晩餐会あり。席上、村田氏の「アイノ」おどりを演ぜられたるは、  
大いに旅鬱を散ずるに足れり。当地開会に関し特に尽力ありしは橘、〔名〕  
古屋両氏なり。

二十六日 晴れ。朝、紋別を発し、馬上にて行くこと七里、湧別村（現

在北海道紋別郡湧別町〕に入る。途上、野広く林深く、往々紅葉を見る。いたるところみな牧場なり。

### 南船北馬集第二編に登場した紋別の人物

古屋 ふるや 憲英 けんえい

甲府出身の医師。祖父、父ともに漢方医。根室より紋別に移り住み、明治十九年に病院「以仁堂」を開業。明治二十一年に紋別郡一円の村医に任命される。明治二十七年頃、現在の消防署の場所に二階建て洋風建築の医院（静春堂、古屋医院、紋別病院などと呼ばれた）を開設。「静春堂」医院の名前は古屋が公医をかねて個人病院を開業したときの医院名と推測される。明治三十七年～四十年には道議会議員も務めた。大正八年逝去。

橘 たちばな 智照 ちしょう

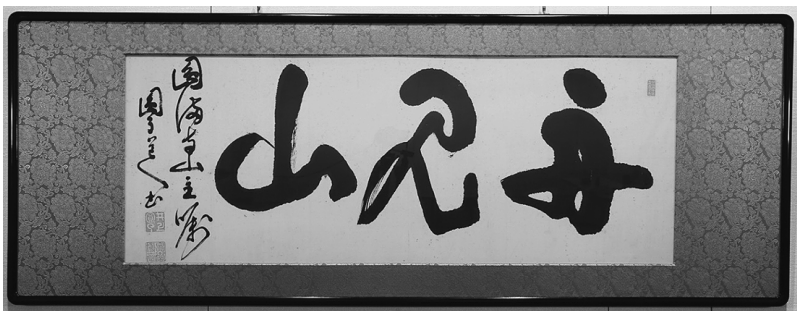
明治五年生まれ。加賀国浜松、専通寺第十六代橘智仙の次男。明治二十五年八月、東本願寺にて得度。京都に学ぶ。明治三十七年来紋。明治三十八年五月舟見山圓満寺開基住職拜命。明治四十三年東本願寺第三代門跡大谷光演法主の御来山を仰ぐ。昭和九年御堂改築（現御堂）。真宗大谷派北海道教区会議員等歴任。昭和十年七月、第二代橘薫一に譲職。昭和十六年逝去。



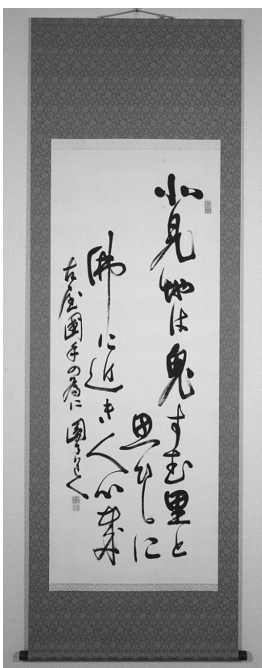


たかの  
しょうろく  
高野 庄六

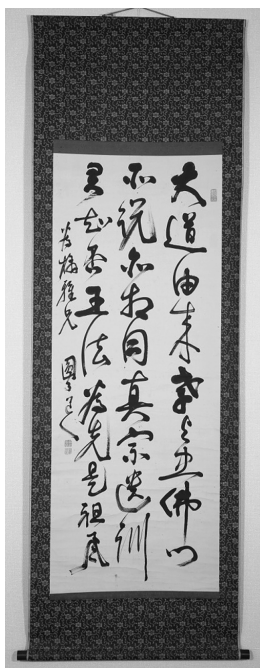
嘉永六年（一八五三年）新潟県長岡で生まれる（井上田了と同郷）。明治二十四年に一族で紋別に移住し、主に漁業経営を行ない、加えて農業、畜産、商業等も幅広く手がけた。人柄としては、面倒見がよく、政治力もあり、大勢の人間を束ねる器を持った人物であった。高野は利益を地元紋別に残し、各種事業を展開し、後の紋別の経済発展にも大きな影響を与えた。大正元年、商用の帰路脳溢血で亡くなった。紋別市立博物館の展示室には、高野が明治二十六年に建てた「高野番屋」の一部が再現展示されている。



明治40年9月、井上円了が紋別の円満寺において講演を行った時に、橘院主の依頼により揮毫した「ふなみざん」の山号額(5)。明治四十年歳在丁未、舟見山、圓満寺山主嘱 圓了道人書、井上圓了 文学博士



明治40年9月、井上円了が紋別で宿泊した静春堂医院を経営する古屋憲英氏のために揮毫(7)。  
明治四十年歳在丁未、北見地は鬼すむ里と 思ひに 佛に近き  
人心哉、古屋国手の為に 圓了道人、井上圓了 甫水



明治40年9月、井上円了が紋別の円満寺において講演を行った時に、円満寺住職橘智照師のために揮毫(6)。  
明治四十年歳在丁未、大道由孝与忠佛門 所説亦相同真宗遺訓  
君知否王法為先是祖風、為橘雅兄 圓了道人、井上圓了 甫水



井上円了が古屋憲英に宛てた手紙(8)  
紋別滞在中の御礼と近況等について書かれている。

拝啓先般御地滞在中ハ  
非常御尽力ト過分ノ  
御優待ニ預リ萬謝  
此二御座候其後無  
事昨日網走ニ滞在  
根室行ノ便船待居申候  
御地村長、校長、高野  
君等々宜ク申上可被下候  
当今後修身教会設  
立ノ誰守更ニ御尽力  
被下度萬望ノ至ニ御座候  
旨趣書一葉封入候二付  
御参考ニ相備可被下候  
先ツハ不取敢先日ノ  
御礼迄ニ如此候也  
草々拝具

明治四十年  
十月二日 井上円了  
古屋国手殿  
奥様へ宜ク申上可被下候

猿間湖上行  
建心九月時蕭疏荒  
草沙原一望虚尽日猿  
間湖上路秋風躍馬入  
常閑  
結衣  
月山林已帯紅能取湖  
東尋字舍爐邊温酒  
醉秋風  
谷間の雲は醸したごとく氣  
もよう。九月の山林は早  
くも紅葉になつてゐる。能  
取湖の東の学校をとめゆき  
ぬ。囲炉裏辺に酒を温めて  
秋風に酔う。

猿間湖上行  
北の田舎の九月は、ますま  
す寂しく、荒草の砂原は見  
渡すかぎり何も無い。ひね  
もすサロマ湖上の道たどる。  
秋風の中、馬を駆つて常呂  
にいたる。  
能取湖東所見  
溪雲釀而氣濛々九  
月山林已帯紅能取湖  
東尋字舍爐邊温酒  
醉秋風  
右ハ高頭君ニ供し申候 甫水

## 池澤亨追想録

井上円了が紋別を訪れた明治四十年、当時八歳だった後の円満寺第二代住職 橘薫一たちばな くんいちは、後年『池澤亨追想録』(9)において、その時のことを回想し文章を寄せている。

『池澤亨追想録』 十八ページより抜粋

### 〈中略〉

明治四十年九月二十四日は秋季皇霊祭に當つてあます。この日の朝定期船伊勢丸は文學博士故井上圓了先生を乗せて紋別へ入港しました。上陸した博士は同日と次の二十五日の二日間紋別村の小學校及び圓満寺で前後四回の講演をされ非常な盛會せいかいを呈しました。當時とうじの交通不便な村として博士の講演等は實に珍しく啓蒙上大變たいへんな役割を果たしたに相違ありません。

### 〈中略〉

## 2 紋別市内の校歌につながる井上円了との縁

### 紋別市内の五つの校歌・園歌の由来

後に円満寺の第二代住職となる橘薫一は、井上円了が紋別を訪れたことが縁となり東洋大学に入学した。そして、大学の同期で、生涯の友となる勝承夫と出会った。

大学卒業後、橘薫一は出版社の講談社、博文館を経て、紋別に帰郷し円満寺の第二代住職となった。勝承夫は

圓満寺住職

橘たちばな

薫一くんいち



卒業後、報知新聞社の記者をしていたが、退社し、作詞家となった。

昭和二十七年、紋別小学校創立六十周年を記念して校歌作成の機運が高まり、橘薫一は親友である勝承夫に依頼した。その年の八月、勝承夫は作詞構想のため紋別を訪れ、市内や学校を視察して作詞を行い、作曲を下總皖一に託し校歌は完成した。その後、潮見小学校、渚滑中学校、大谷幼稚園等の校歌・園歌が勝承夫により作詞された。

井上円了が紋別を訪れたことに始まる縁は、橘薫一と勝承夫との出会いを生み、二人の友情を介して、校歌・園歌へとつながった。井上円了が作った縁は、紋別市内の校歌・園歌に姿を変え、今も歌い継がれている。

橘なはな薫一くんいち（明治三十三年九月二十七日―昭和五十三年九月十日）

円満寺第二代住職。



小樽生まれ。四歳の時に紋別に移り住む。八歳の時に井上円了が紋別を訪れたことが縁となり、真宗京都中学を経て、大正九年東洋大学に入学、印度哲学倫理学を専攻した。卒業一年前の大正十二年には、当時の東洋大学学長境野哲による大学幹事解職に始まる学校騒動（境野事件、東洋大学紛擾事件または騒擾事件と呼ばれる）において、橘薫一は学生による学長排斥運動のリーダーとして陣頭に立った。メンバーの中には生涯の友となる勝承夫（作詞家、後の東洋大学理事長）、柳井正夫（後の



博文館時代の橘薫一

東洋大学校友会副会長）らも含まれていた。この騒擾被疑事件により橘らは刑務所に三か月入ることになり、放校処分となるが、学長が岡田良平に代わって放校は取り消しとなり、翌大正十三年に大学を卒業することができた。

卒業後すぐに、出版社の講談社に入社し「講談倶楽部」の編集等に三年、その後博文館に移り、雑誌「朝日」の編集長、「広辞苑」の基になった「辞苑」の編纂等に携わった。

昭和十年、紋別に帰郷し、円満寺第二代住職となった。井上円了の「建学の精神」を敬愛し、昭和二十八年東洋大学校友会紋別育界の重要ポストを担っていた。昭和二十七年四月から昭和三十八年九月まで十一年間にわたり教育委員（うち三年間は委員長）を務め、道立紋別南高校の設立に尽力したほか、博物館建設準備委員等を歴任した。文化面では北潮文化懇話会をつくり、版画家の棟方志功や、陶芸家の河井寛次郎、濱田庄司（のちの人間国宝）を招聘するなど紋別の文化向上にも貢献した。

勝<sup>かつ</sup>承<sup>よしお</sup>夫（明治三十五年一月二十九日―昭和五十六年八月三日）

詩人・音楽教育者。

東京都四谷生まれ。東洋大学卒業。旧制中学時代から詩人として活躍し、東洋大学在学中には正富汪洋主宰の



「新進詩人」に参加し、宵島俊吉の名で詩を発表した。大正十年に井上康文らと「新詩人」、大正十二年には東洋大学出身の岡本潤、角田竹夫らと「紀元」を創刊した。

昭和二年に東洋大学を卒業した後は報知新聞社に入社し記者となるが、昭和十八年には退社し、文筆活動に専念するようになる。昭和二十七年八月八日、校歌の作詞構想のため紋別を訪れた。その後、東洋大学理事長、日本音楽著作権協会会長等を歴任する。

詩集には「惑星」「朝の微風」「白い馬」「航路」などがある。童謡「歌の町」「生活の歌」「若い合唱」などのほか、全国の小・中学校、高等学校の校歌の作詞を数多く手がける。

現在、紋別市内の小学校で使用されている音楽教科書において、同氏が作詩したものは、二年生の「こぎつね」、五年生の「こきょうの人々」がある。

〔出典…「紋別市立紋別小学校九十年史」より 一部修正〕

勝承夫が校歌等を作詞した北海道内の学校一覧

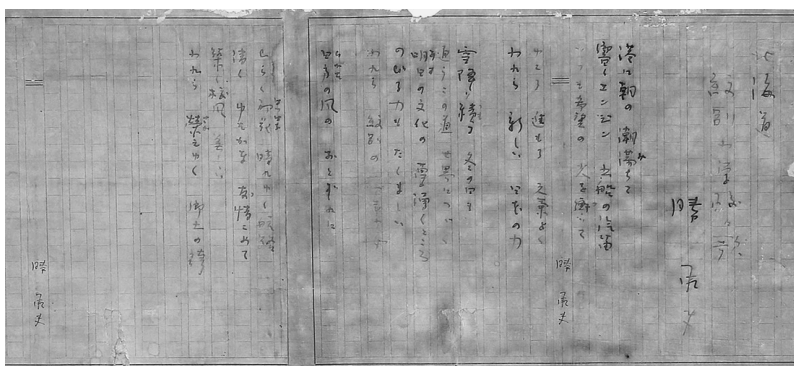
- ・私立紋別大谷幼稚園（紋別大谷認定こども園）
- ・私立紋別市立北小学校
- ・紋別市立紋別小学校
- ・稚内市立稚内東小学校

- ・紋別市立潮見小学校
- ・紋別市立渚滑中学校
- ・紋別市立鴻之舞中学校
- ・興部町立興部小学校
- ・道立興部高等学校
- ・旭川市立青雲小学校
- ・旭川市立大有小学校
- ・旭川市立東五条小学校
- ・旭川市立正和小学校
- ・旭川市立聖園中学校

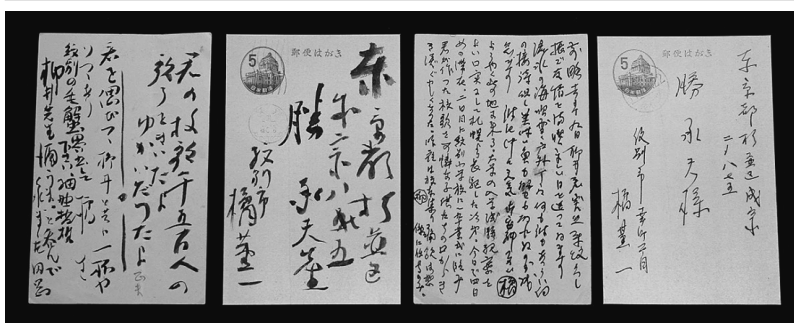
- ・名寄市立名寄中学校
- ・道立名寄高等学校
- ・道立美深高等学校
- ・夕張市立夕張等一小学校
- ・釧路市立景雲中学校
- ・道立釧路商業高等学校
- ・道立千歳北陽高等学校
- ・道立森高等学校
- ・私立創成高等学校（学生歌）

〔出典…「勝」承夫詩集 下巻〕より〕

勝承夫による紋別市立紋別小学校校歌の自筆原本(10)



紋別市立紋別小学校校歌	作詞 勝 承夫 作曲 下總 皖一	一 港に朝の 潮満ちて	響くエンジン 出船の汽笛 いつも希望の 光を衝いて ゆこう 進もう 元氣よく われら 新しい 日本の力	二 雪降り積もる 冬の日も 通うこの道 世界につづく 明日の文化の 夢湧くところ のぼる 力も たくましい われら 紋別の 少年少女	三 日方の風のおとずれに ひらく初花 晴れゆく航路 清くゆたかな 友情こめて 築く 校風 美しい われら 榮えゆく 郷土の誇	昭和二十七年十月十二日制定
-------------	---------------------	-------------	--	--	--	---------------



左2枚：柳井正夫、橘薫一、細野哲雄、田岡の4名が、勝承夫に宛てた寄せ書き。《表面》は複製(11)。

右2枚：橘薫一、柳井正夫の2名が、勝承夫に宛てた寄せ書き。《表面》は複製。  
※柳井正夫・東洋大学校友会副会長(12)

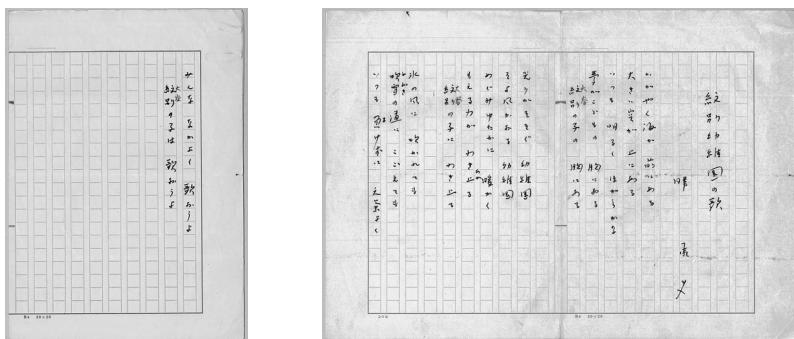
前ページハガキ（寄せ書き）左 2 枚の記載内容

《表面》	東京都杉並区
	成京八七五
	勝 承夫先生
	紋別市
	橘 薫一
《裏面》	
	君の校歌千五百人の
	歌声をきいたよ
	ゆかいだったよ 正夫
●	
	君を偲びつゝ柳井と共に一杯や
	りつゝあり 橘 さ
	紋別の毛蟹思い出して
	下さい。細野哲雄
	柳井先生酒うまいと呑んで
	くれました 田岡

前ページハガキ（寄せ書き）右 2 枚の記載内容

《表面》	東京都杉並区成京
	二ノ八七五
	勝 承夫様
	紋別市幸町一丁目
	橘 薫一
《裏面》	
	前略去る十九日柳井君突然来紋久し
	振で友情を満喫楽しい日を送ってゐます
	流水の海吹雪く戸外丁度何も彼もあつらい向
	の接待但し美味しい魚も蟹も取れぬのが残
	念です 彼も中々元気御安神（心）下さい 橘
	ようやく此の地に来る。大学の入学試験観察を
	よい口実にして札幌より長駆した次第。今日で四日
	めの滞在。二目に紋別小学校にて卒業式に臨み
	君が作つた校歌を可憐な子供たちの口からき
	き涙ぐましくなつた。昨夜は校友集り痛飲は想
	柳 儘に任せるのみ。

勝承夫による紋別（大谷）幼稚園〔現在の紋別大谷認定こども園〕園歌の自筆原本 (13)



紋別大谷認定こども園園歌

作詞 勝 承夫  
作曲 小村三千三

一

輝く海が前にある  
大きい空が上にある  
ランランランランラほがらかに  
夢が子どもの胸にある  
紋別の子の胸にある

二

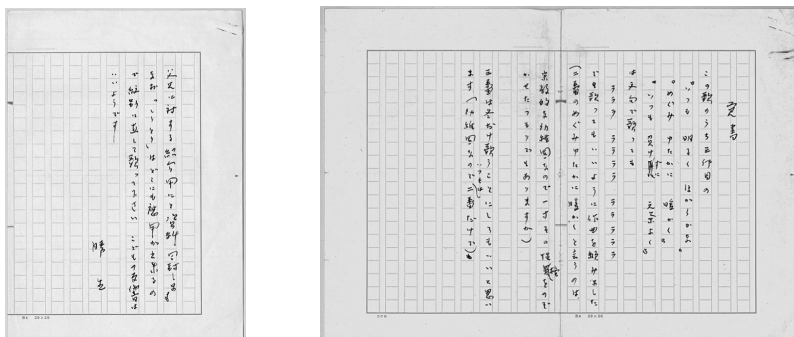
光がそぐこども園  
そよ風かおるこども園  
ランランランランラあたたかく  
燃える力がわき上がる  
大谷の子にわき上がる

三

氷の風に吹かれても  
吹雪の道にこごえても  
ランランランランラ元氣よく  
みんな仲良く歌おうよ  
大谷の子は歌おうよ

昭和四十五年四月一日制定

勝承夫による紋別（大谷）幼稚園〔現在の紋別大谷認定こども園〕園歌の覚書の自筆原本 (14)



前ページ覚書の記載内容

覚書

この歌のうち三行目の

『いつも 明るく ほがらかな』

『めぐみ ゆたかに 暖かく』

『いつも 負けずに 元氣よく』

は文句で歌っても

ラララ ララララ ラララララ

で歌ってもいいように作曲を頼みました。

(二番のめぐみゆたかに暖かくと言うのは、宗教的な幼稚園なので一寸その性格をのぞかせたつもりでもあります)

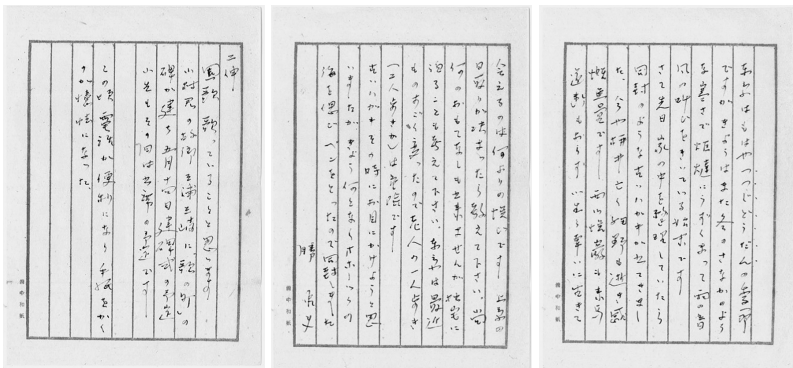
三番は冬だけ歌うことにしてもいいと思います。(幼稚園なのでいつもは二番だけです)

父兄に対する紹介用にと資料同封します。

なお「しりとりに」はどこにも応用が出来るので紋別に直して歌って下さい。こどもの反響はいいようです。

勝生

勝承夫が橘薫一に宛てた手紙(15)





前ページ手紙の記載内容

東京はもはやつつじどうだんの季節ですが、きょうはまた冬のさなかのような寒さで炬燵にうずくまって雨の音風の叫びをきいている始末です。

さて先日、家の中を整理していたら同封のような古いハガキがでてきました。今や柳井亡く、細野も逝き感慨無量です。西川悦巖も〇〇

〇〇もおらず、小生ら幸いに生きて会えるのは何よりの悦びです。上京の日取りが決まったら教えてください。尚何のおもてなしも出来ませんが拙宅に泊ることも考えて下さい。東京は最近ものすごく変ったので老人の一人歩き（二人歩きか）は危険です。

古いハガキその時にお目にかげようと思いましたが、きょう何となくオホーックの海を偲びペンをとったので同封しました。

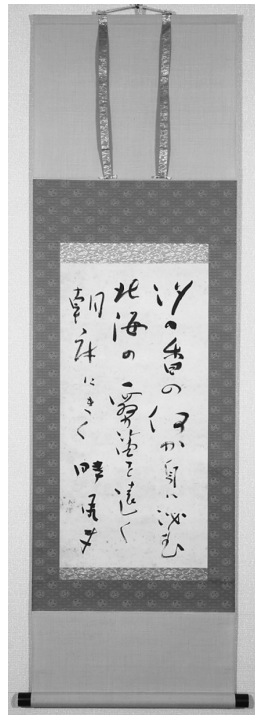
勝 承夫

二伸

園歌 歌っていることと思います。

小村君の故郷三浦三崎に「歌の町」の碑が建ち、五月十四日建碑指揮の予定。小生もその日は出席の予定です。

この頃、電話が便利になり、手紙をかくのが億劫になった。



汐の香の何か身に沁む  
北海の霧笛を遠く  
朝床にきく  
あさどこ

勝 承夫

紋別市立潮見小学校所蔵

### 3 明治の先駆者 井上円了の足跡

学校法人東洋大学発行『井上円了の生涯 哲学の伝道者をめざして』（16）の掲載内容により解説パネルを作成した。

本報告では内容は割愛する。

### 4 書家 井上円了

井上円了の書幅（16）を展示し、書家としての井上円了の魅力を紹介した。

明治三十七

ことうぶに なき二ひといたるとき  
弧都冬尔無人到時  
ありぜんせつたいしずかにきえ  
有残雪体静帰

井上甬水道人書

井上圓了號  
甬水無藝  
庵拙筆塵

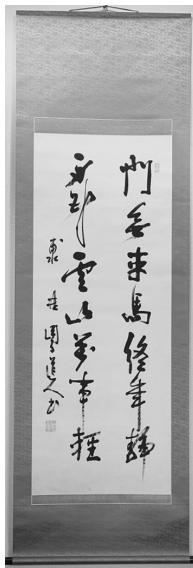


大正三年  
歲在甲寅

もん二なクらいばおわるとししずかに  
門無來馬一終二歳静一  
身めぐるうんざんらばんじかもし  
環二雲山一萬事輕

甬水 井上圓了道人書

談怪我  
甬水圓了  
即是怪

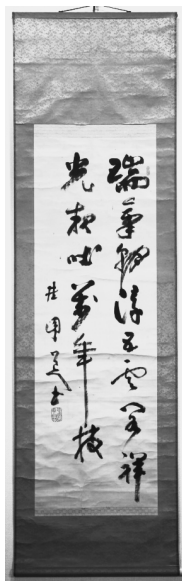


明治四十四  
辛亥之歲

瑞氣朝浮五雲開祥  
光親吐萬年枝

井上圓了呈書

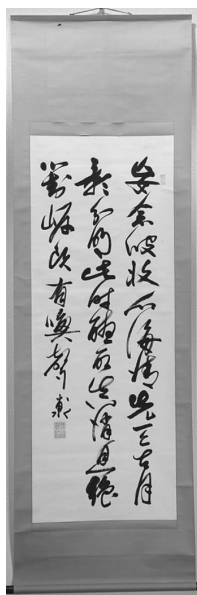
井上  
圓了  
號  
甫水



大正二年  
歲在戊午

妄念波技心海情先至二七月一  
於二分明此時一殖取真情且絶  
對岸改有二興聲一

井上  
圓了  
號  
甫水



## 5 その他の展示物

井上円了の著作として、『南船北馬集 第二編』(17)、『仏教活論序論』(18)、『妖怪学講義』(19)を展示した。また、井上円了の略年譜(20)を展示した。

## 6 講演会

令和元年六月二十二日(土)、紋別市立博物館郷土学習室において、東洋大学の三浦節夫教授による講演会「明治の先駆者・井上円了」を実施した。五十一名の参加があった。

なお、本講演会は東洋大学社会貢献センター講師派遣事業の協力により開催したものである。



## 謝 辞

本展の開催にあたり、次の方々ならびに団体等より資料提供、ご協力をいただきました。  
ここに記して深く感謝申し上げます。

### 【資料提供】

橘家様



円満寺様

古屋英樹様

東洋大学井上円了研究センター様

中野区立哲学堂公園管理事務所様

学校法人紋別大谷学園様

紋別市立紋別小学校様

紋別市立潮見小学校様

【ご協力】

小川昭一郎様

古屋正徳様

浜田喜久子様

【註】

- (1) 主催は紋別市教育委員会、紋別教育文化振興会、東洋大学校友会紋別支部。後援は学校法人東洋大学、東洋大学校友会、学校法人紋別大谷学園。協賛は北海道新聞社紋別支局、株式会社北海道民友新聞社。開催期間は令和元年六月一日（土）～六月三十日（日）。会場は紋別市立博物館・市民ギャラリー（北海道紋別市幸町三丁目一―四）。会期

中、二十六日間で二四〇〇人の入場があった。

(2)

写真提供…東洋大学井上円了研究センター

(3)

写真提供…東洋大学井上円了研究センター

(4)

橘家所蔵

(5)

円満寺所蔵

(6)

橘家所蔵

(7)

古屋英樹氏所蔵

(8)

古屋英樹氏所蔵

(9)

橘家所蔵。『池澤亨追想録』池澤憲一編・発行／昭和十四年八月二十日発行。井上円了が紋別を訪れた時の様子を紋別の人物が伝える貴重な史料となっている。

(10)

紋別市立紋別小学校所蔵

(11)

橘家所蔵

(12)

橘家所蔵

(13)

学校法人紋別大谷学園所蔵

(14)

学校法人紋別大谷学園所蔵

(15)

橘家所蔵

(16)

橘家所蔵

(17)

東洋大学井上円了研究センター所蔵。井上円了編・著、明治四十二年一月十日修身教会拡張事務所発行。井上円了が明治三十九年から大正七年に行なった全国巡回講演（巡講）の記録をまとめたもの。巡講の目的は国民道徳の向上のためであり、修身教会の本山となる「哲学堂」の拡張と充実を目指して活動した。第二編には宮崎県、大分県、紋別を含む北海道、豊前・豊後、熊本県における足跡が記録されている。

(18)

東洋大学井上円了研究センター所蔵。井上円了著、明治二十年二月哲学書院発行。日本の伝統宗教であり、自分自身が幼少期より身近に接してきた仏教を東洋の哲学として評価するとともに、明治以降、衰退していく日本仏教の再興と近代化を強く主張し、発表当時、大きな話題となった。円了の代表作のひとつにあげられる。

(19)

東洋大学井上円了研究センター所蔵。井上円了編・著、明治二十九年六月十四日哲学館発行。人々から「妖怪博士」

(20)

の愛称で呼ばれた井上円了が、東京大学在学中より取り組んできた妖怪研究は、いわゆる「化け物」に限定されるのではなく、こっくりさん、幽霊やマジナイなどの俗信、天変地異や精神現象など、この世のありとあらゆる「不思議」な現象を対象としている。井上円了の代表作「妖怪学講義」は、迷信を社会から取り除き、合理的思考を普及することによって日本の近代化を目指した円了の妖怪研究の集大成ともいえる。

三浦節夫著『新潟県人物小伝 井上円了』（平成二十六年五月二十四日新潟日報事業社発行）一〇二ページ～一〇七ページの井上円了関係年譜を参照しパネルを作成した。